

JSL児童のためのイラスト付きリライト教材の作成と授業実践

—小学校国語の物語教材を中心に—

村山 勇 (兵庫日本語ボランティアネットワーク)

1. 実践の目的

JSL 児童が小学校の国語の物語教材の内容理解を効果的に進めるためのイラスト付きリライト教材の作成及びその教材を用いた授業の効果を明らかにする。なおこれは主に平成13年度から21年度の神戸市立A小学校での実践である。

2. 実践の価値・意義

発表者は小学校国際教室の取り出し授業で19年間、JSL 児童へ日本語や教科の指導をしてきた。その経験から、JSL 児童にとって最も理解困難なのは国語の物語の読解である。それは、彼らが学習している初級日本語のテキストでは扱っていない表現が頻出したり一文が長く複雑で主語が不明瞭だったりするからである。またイラストが少なく、物語の設定や登場人物のイメージが作れないため、あらすじが理解できないからである。そこで、彼らの内容理解が進むように、本文をリライトしたり、イラストを増補したりした教材を作成し、授業をしていくことを実践した。ここでいうリライトとは、光元・岡本(2006)が言う「入国して間もない時期から、教科の学習に入りやすくするために、教科書本文を子どもの日本語力に対応させて書き換えた教材」(p.3)である。

3. 教材の内容

光元版のリライト作成基準では文が6種類あり、それぞれにレベルが3段階ある。発表者は、このうちの「あらすじリライト」を採用し、レベルは「レベル1、敬体で単文、複合動詞や受身・使役は他の表現に変える初級用(物語の主題にあわせて省略や補足もある)」と「レベル2、教科書の文体と同じで、複合動詞や受身・使役も使う中級用」を作成した。

またイラストについては、元の(絵)本を参考にして行動や心理の変わるところを取り上げレベル1のリライト文と合わせた。それが元の(絵)本になかった場合は専門家である図工科教員に依頼し新しく描いた。また本文にはないが「言外の意味」として必要なイラストも描いた。そのため、教科書よりもイラストの数はずっと増えた。なおほとんどの物語教材は日本語の縦書きなので、イラストも右から左へと進行していくようにした。まれに物語の原作が日本語ではなく左から右へ進行するイラストもあるので、左右反転させた場合もある。

4. 実践方法

A 小学校には、JSL 児童が在籍学級の国語や社会科の時間に移動してきて、個別や少人数で日本語や教科の学習をする国際教室がある。上記の教材を国際教室の取り出し授業で使い、JSL 児童の理解度をみる。その際に、児童の興味を引き付けるため、以下のようなゲーム形式にした。

4.1 指導者はイラストをアトランダムに並べて児童に示す。

4.2 指導者がリライト文を①から順に読む。児童はそれに合うイラストを見つけ、順に黒板に

貼っていく。(右から左へ貼る。児童が順番を間違えていた場合は、指導者が簡単に説明をして入れ替える。)

- 4.3 イラストが順番通りに貼られたら、次は児童にアトランダムにしたリライト文を読ませる。その文がどのイラストに合うかを考えさせ、イラストの下に文を貼り付けさせる。この時、児童が複数いるなら、相談させる。
- 4.4 イラストも文も順番通りになったら、指導者は主題にせまる質問をしていく。この時、児童の日本語力を考慮する。
- 4.5 児童が質問に答え大体のあらすじを理解したら、確認のためのワークシートをさせる。この時、黒板にはイラストのみを残し、リライト文や質問の答えは残さないようにする。

今回の発表は、主に、光村出版小学校四年生国語「白いぼうし」で作成したリライト教材を用いたものである。第一は国際教室で3人のJSL児童で実践した。第二は一般の学級の一斉授業で、この教材を用いて実践をした。それぞれ内容理解の程度を質問やワークシートで測定した。

5. 結果と考察

JSL児童は、タクシー運転手の松井さんが「わざわざここにおいたんだな。」というところで、「だれが何をおいたのですか。」という質問をしたところ、答えることができなかった。日本との文化の違いがあることが発見できた。また一般学級の児童の中にも、理解が不十分である児童が散見できた。しかし、JSL児童も一般学級の児童もリライト教材を用いたところ、授業に興味をもって取り組み、この後内容理解が進んだ。JSL児童が国語を好きになり、学校生活に適應していく有効な方法だと思う。また理解が遅れがちな日本人の児童にとっても有用であると思う。特別支援学級でもリライト教材が使用できると思う。

JSL児童にとっては、その特有の文化によって理解困難な面もあることが分かってきた。この実践では、昆虫に対する関心度や親密度は国によって大いに異なることが発見できた。しかし、在籍学級の授業の予習となり、自信をもって学級での学習に参加することができた。今後は各国文化の特性をさらに発見し、教材作成や授業に活かしていきたい。また物語に多い「行間を読む」、「言外の意味を考える」、「作者の意図を考える」、「主題を考える」ことなど慣れるために、ワークシートの設問をさらに工夫していきたい。

【引用文献】

光元・岡本 2006 『外国人児童生徒を教えるためのリライト教材』(ふくろう出版)